



伏請
玄同先生訂

借
600
181





世に吾輩と儂約はしらんに
あつたらむものありて強ひて知れ
るもちんを知らず會つて施を
すはつらん取をさしん識を
そそん利にうつるはいと苦す
とのに吾輩はくつて食を乞ふ
し〜非常の極み甚しく者
物販の貧乏を救ふ救ふに
教へし餘りて旅亭に
濟らんふし〜怨りて是
儂約と〜

満信先生に説く此道と字〜其

き〜思慮〜往年此道は得たるは
何と〜字せん其文字と彼是〜考へて

門不曾
號 600
卷 181



玄同先生の乞問の画名と考定
只この書の未鷹孤志の

勢亀山候野僕潘巖父小野澤陽長

多行ふより画と好々孤志の待野休白

満信先生に託して此道と学べし其

きつゝ思慮して往年此を孤得たるは

何と云字只其文字と彼是と考へて

Handwritten notes on a separate sheet of paper, including the characters '玄同' and '潘巖'.

先一乃字と得たり下に屬するの文字
道經のまゝと思ひ定らるるもの
前年 歳十一 家嚴の生國武藏のちり
川越のちりも 暫滞留の中農業乃
い切にいりぬ又種と年一苗代
むらまゝ 誠見聞し其まゝに只若辛
ゆゑの今もや思ひ忘まゝに在



しにいつのちり苗乃文字しを撫育の
勤怠のちりおねのちり 熟なるの期
のちりんちり好なるちり 弱年乃
嗚呼のちりも 問難く又三四の
年と過すのちり 師乃余も今も
もやけさのちり 懈るのちり
免許のちり 先生に乞ふ一苗

と齋号と休阜と字をくつと又丙三年
の後故何と

東叡大王乃庸と出侍と八九年乃中
休阜乃文字信友果の説も可なり
と又是は好まらるる號而と
用い居る一日孟子と闡と梁惠王
の上は一苗の文字熟と

一乃字派説出と未と苗の字
大賢の諱暗と符合の思ひは是
依るははるるなりは章句中と
さうと興之の二字派摘取と
是と用ひたれ其訓古字忘るれ
大聖の音通と
又迷惑の念發と是派別号と

虚凝の切よみか興之堂の
おしつうの師満信先生と本所扇
橋の位狩野隠者素川章信先生と相
よ先生一時の英傑の成るつて僕
とよわが附属の成るつてけこ成勵
し心気よくつて屢章信先生と膝
交つて教諭と受一兩年よ章實と

諱一素之と字はか免許を念
怠慢の学は存した茲に文政癸
未乃秋

王命のよ上野國甘樂郡妙義山
の坊中の壁隕志の早臣の通け
の石塔寺の都
至るは御座と設る

師よのたにふれいふたむれふ務に
何れと執心の道ふれいふたむれふ
了命と奉る甲申乃復より秋
事成早帰る寸功

王室よとてんく画史の称号と賜ひ
よとてんく早臣の面目是より過は是より

くく大小くく繪の事と司務也
くくくくくく乙酉の復故くくく
と立鈴木の家名と嗣くくくく
其祖先鹿橋侯の藩くく出くく暫民間
在り彦三郎くくくの壮年くくく徳
りく故り我
王室の儒官くくく俗稱を主馬と

い龍松園と号し咲花翁と別号し
姓を藤原諱を元義字を浩然といふ
三代の

王の近侍し是も又一時の隠君子
といめる庚辰の冬八十二歳より
世に暫嗣跡を一女に傳ふ宇
野氏の女より浩然外戚の孫たる是

と僕に配し二世龍松園の主たり
たり茲においし生涯の規矩を
定りたれハ願ふを大に道に志
し儒官たるも元義の志も
廢すと思ふものか浩然の字を
受嗣たりたり畫家に轉すも寸
志を致する端なりと思惟し

二三乃盟兄第も心根とくたふひ粗
決定しつゝあるしつゝ一日画席と訪ふ
人有るもあつて足下の号を一苗といふ
すや既し先年足下の號をもうつて
三谷佃先生と問きし時先生の答は
一苗の文字もその名もよかぬん聖語の
苗よしつゝ秀さつたものほつて秀る實ら

つらつものほつて實しつゝこゝ語れと
余を側しつゝきつて指たつたこれの諱も草
實れれい其由縁れつゝもほつた各を
體とほつたもの諱もほつた苗よしつゝ
浩然のつ時をまつた荒年の祥と相
近し加字と久和字と違ひほつた俗
音を遠かす考ふへしつゝ僕是以聞

こゝを見戲、近、い、世道を修、
森羅萬象と通、時を俗通と敵、
事未熟、難と業、再び疑惑
の念生、退、左傳と、荒年
と反、有年の字、得、其
音訓も固、倍、通、
安、世と、の字、得、
おぼ

快然、僕、書、見、甚、狭、
自ら定、の見、只、恐、有年の
文字、諸候、大夫、人、吉、祥、
早、禄、無、位、其、身、應、
先生、の、博、覧、多、智、可、愛、可、尊、
後、に、感、激、す、
後、に、感、激、す、
後、に、感、激、す、

の日や面交と得方の日やふんや時
到らんや先生とあはれに世感いと告ぐ
先生乃高論と聞まふかゆき
恥かやうし其来歴かいつけ並ぬ
と先生の見よふんを生涯
徹心一貫と疑惑の念生
すやふんは先生の博識と以

此巻末、ふんやとさきと一後んふを
幸い何事とあはれやうや伏し希
ふの

文政十三年十一月一日 章實誌

Handwritten text in a cursive script, likely Japanese, covering the majority of the page. The text is arranged in vertical columns, starting from the right side and moving towards the left. The characters are somewhat faded and difficult to decipher precisely, but appear to be a continuous flow of writing.

